

第2部：現行リスクアセスメント手法の問題点解消のための考え方

2. どうすればリスク評価のバラツキを少なくできるのか

(1) なぜリスク評価の結果がバラつくのか

同一の危険源・危険事象に関してリスクの評価は誰がやっても同じ結果にならなくてはなりませんが、判定基準があいまいだと評価者個々人の経歴・経験および置かれた立場により、同じ設備の同じ危険源の評価においても下記のような状況が生じます。

現場の経歴が長く種々な経験をしている人だと「この機械は場合によって手順書にない使われ方をする。そのため現在の安全対策だと被災の可能性は『ある』し、その場合の被災の程度は『重傷』になる」と判断するものを、経験の浅い人だと「この機械のこの危険源については、現在の安全対策であれば被災の可能性は『ほとんどない』し被災しても『軽傷』である。」と判断する可能性が高い。

現場の経歴が長く種々な経験をしている人だと厳しい判断ができるかといえそうでもなく、安全の法令や規格、及び自社だけでなく他社も含めた多くの災害事例を熟知している専門家に比べたら判断が甘い可能性がある。

このような経歴・経験による評価のバラツキを防ぐために、設備、製造、安全といった異なる部署の担当者が集まって評価を行い、その結果について協議して調整するのが望ましいが、全ての部署が知識・経験の豊かなベテランを有しているとは限らない。

バラツキが生じた場合に協議を行う場合も、最終決定者（責任者）の置かれた立場、思想信条によって判定が左右される。

客観的な立場に立って「最悪のことを考えれば被災の可能性は『ある』」し、その場合の被災の程度は『重傷』である」と判定する責任者もあれば、会社の経営状態と自部署の置かれた立場（予算、緊急性など）を配慮するがゆえに「そんな最悪のケースは起こりえないので被災の可能性は『低い』」し、被災の程度は『軽傷』である」と判定する責任者も存在する。

上記のようにリスクアセスメントの実施者および判定者によって評価結果にバラツキや偏りが生じるだけでなく、下記の問題もあります。

具体的で細かな基準を作っても必ず例外的なことは発生する。また、具体的な「許容可能・不可能の判定条件」を作っても、どちらにも判定できるケースが必ず存在する。

新しい設備を設計・製作する場合は、現物がなく、作業手順も確定してないので、既存設備（現物があり、作業手順も確定している）のリスクアセスメント基準を用いてリスクを評価することは難しい。

上記からいえることは、より論理的、客観的にと考えて基準の内容を詳細に規定し過ぎても実用的であるとは限らないということです。

リスクアセスメントは「機械類に付随する危険源の審査を系統的方法で実施する一連の論理的手順（ISO14121）」と定義されていますが、実際に行うとなると上記のようにそれを実施す

る「人」の能力および置かれた立場により変化するものであり、規格の文言を真に受けて「リスクアセスメント基準を作成しさえすればリスクを論理的に低下させることができる」と考えることは危険です。

誰がやっても評価結果のバラツキが少なくなり、かつ実用的なリスクアセスメントにするためには、どのような根拠(論理)に基づいて各評価項目を規定すればよいのでしょうか。

以下、個々の評価項目について私の考えを述べます。